神戸女子大学文学部紀要　57巻　47－62　2024

運動部活動現場における指導者のペップトークについての検討
－高等学校女子チーム指導者の事例から－

江　尻　沙　和　香
住　本　純

An Examination of Coaches' Pep Talk in Athletic Club Activities Sites
－A Case Study of a Coach of a High School Girls' Team－

EJIRI Sawaka, SUMIMOTO Atsushi

1．緒言

スポーツ庁（2013）は、学校教育での運動部活動において、実際の活動での効果的な指導に向けて、「適切な指導方法、コミュニケーションの充実等により、生徒の意欲や自主的、自発的な活動を促す」ことを提示しており、日常の指導でのコミュニケーションの充実の必要性を示している。また、渋谷（2015）は、選手と指導者の信頼関係を築くために、選手がポジティブになる、やる気を高めるような言葉がけによるコミュニケーションの重要性を示している。

上記のような選手への言葉がけに関する研究がいくつかある。藤田ら（2017）の高等学校野球部指導者（甲子園大会出場チーム監督）を対象にした研究では、指導者は肯定的な言葉がけを心がけることや励ますこと、試合後には選手の奮闘を称賛することの必要性を示した。更に、選手を対象にした研究では、実力不発揮状態に陥っている選手にとって、指導者・チームメイトから安心を与えるような声がけはメンタル面をリセットし、自信を持ち直すきっかけに繋がること（岩永ら、2019）、選手の「やる気」を高めるために肯定的なフィードバックが有効であること（名取、2007）が報告されている。いずれにしても、指導者から選手への言葉がけの必要性を示しており、肯定的な内容の言葉がけを重要としている。このような指導者から選手へ肯定的な言葉がけの手法として、岩﨑（2010）の「ペップトーク」がある。岩﨑（2010）で解説しているペップトークは、アメリカのスポーツ現場で発生し進化し、指導者が試合前に選手を励まそうとして行う「短い激励のメッセージ」としており、より狭義に定義づけると「短く、分かりやすく、行動指針を明確に伝えるショートスピーチ」としている。岩﨑（2010）は、チーム競技の場合は、選手を含めて多くの関係者間での意思疎通が不可欠であり、個人競技に比べ、意思疎通が容易でないことや、時間のない試合直前に、短くて誰もが理解しやすいスピーチとして、ペップトークが不可欠であることを示している。

また、日本のコーチングはペップトークが欠落しており、普及がされていない状況であり（岩﨑、2010）、ペップトークに関する研究が見当たらない。したがって、現在の高等学校運動部活動の指導者のペップトークの実態について調査することとした。更に、そこから見えてくる指導者のペップトークに至るまでの背景

を明らかにすることにより、今後の高等学校運動部活動での言葉がけやコミュニケーションの在り方についての基礎的知見の蓄積に貢献できると考えた。

上記で示したように、先行研究が乏しい状況では質的調査を用いることが肝要であると指摘されている（メリアム、2004）。更に、インタビューを用いることで、被験者の行動、感情、思考、意図といった観察しきれないものをより深く引き出すことが可能であるため、指導者の使用したペップトークの意図を深く探ることに適している（メリアム、2004）。したがって、本研究の目的は、高等学校女子チーム競技指導歴10年以上の指導者3名を対象にペップトークについてインタビューを用いた調査を行い、現在の高等学校運動部活動の指導者のペップトークの実態と、指導者のペップトークに至るまでの背景を明らかにすることである。

対象者は、以下の選択基準を用いて、目的的サンプリング（メリアム、2004）により選定した。

①高等学校運動部活動の指導者

②チーム競技の指導者

③女子チーム競技の指導者

④高等学校運動部活動での一定の指導経験を持つ10年以上の指導者（高等学校教諭）

選択基準の理由を以下に述べる。

①高等学校現場の運動部活動の指導者を選択した理由は、部活動の活動状況を見てみると、スポーツ庁（2017）の高等学校運動部活動の参加率データから、平成28年度の高等学校全体、男子高校生、女子高校生の参加率が若干ではあるが増加傾向であり、高等学校全体では41.90％と半数に近づいた参加率である。また、高等学校の全国大会の試合の様子等がメディア放映されているのも数多く見かける。しかし、このように部活動が盛んな時期の高等学校運動部活動における「指導者から選手への言葉がけ」に関する研究は非常に少ないことから、高等学校の運動部活動を対象とすることは、非常に意義深いと考えたからである。

②チーム競技の指導者を選択した理由は、岩﨑（2010）は、チーム競技の場合は、選手を含めて多くの関係者間での意思疎通が不可欠であり、個人競技に比べ、意思疎通が容易でないことや、時間のない試合直前に短くて誰もが理解しやすいスピーチとして、ペップトークの必要性が高いことを示していることからである。

③女子チーム競技の指導者を選択した理由は、男子選手に比べ、女子選手における精神的安定や協調性などの心理的側面の因子が高いという結果（田沼ら、2016）を参考に、女子チーム競技は指導者からの積極的な声がけやコミュニケーションが必要と考えたからである。

④高等学校運動部活動での一定の指導経験を持つ10年以上の指導者を選択した理由は松田（2017）の示す10年程度以上の経験を積んだ中堅教員は、学校内においても生徒に関わる生徒指導への意識が強くなると言う点を参考に、10年以上の教員経験がある指導者は生徒との関わり方を熟知しているため、研究対象者としてふさわしいと考えた。

2. 研究方法

2-1. 対象者の概要

高等学校女子チーム競技10年以上の指導歴を持つ現役指導者3名の概要は以下である（表1）。

表1. 対象者の概要

対象者	性別	指導歴	種目名
指導者A	男性	26年	バレーボール
指導者B	女性	37年	バスケットボール
指導者C	女性	12年	野球

表2．インタビューガイド

インタビューガイド	
1	普段の練習時間、回数はどのぐらいですか？
2	普段、選手とどんな会話をしますか？
3	普段の練習の前後のあいさつ場面では選手達にどんな話しをされますか？
4	普段の練習中の選手への言葉がけ、コミュニケーションについて教えて下さい。（試合期に近い時期、遠い時期の違いも聞く）
5	試合前日は選手と何か言葉を交わしたりしますか？
6	試合当日は選手達と何か会話をしますか？
7	試合の前に選手達にはどんな話しをしますか？
8	試合中の選手への言葉がけ、コミュニケーションについて教えて下さい。（ゲーム中、タイムアウト中）
9	試合後は選手達にどんな話しをしますか？
10	先生の今までの経験の中で、最も印象的だった選手への言葉がけや会話について教えて下さい。（良かったエピソード、失敗したエピソードどちらも聞く）
11	先生は「選手に激励する」という点についてどうお考えですか？（褒める、励ます、叱ることについてそれぞれ聞く）
12	先生は、自分以外の指導者の中で「この人の言葉がけ、コミュニケーションの取り方をマネしたいな」など参考にしたい場面などあれば教えて下さい。
13	先生は今後、選手とどういった言葉がけやコミュニケーションを取っていきたいですか？
14	先生の部活動での指導方針や心がけていることについて教えて下さい。

表3．インタビュー時間

対象者	指導者A	指導者B	指導者C	平均時間（分）
インタビュー時間	54分54秒	41分58秒	56分08秒	51分

2-2．インタビュー調査

インタビュー調査は、各対象者に個別で半構造化インタビューを実施し、事前に作成したインタビューガイド（表2）に基づいて行われた。また、岩﨑（2010）の指摘にもあったが、ペップトークは国内で普及されていないため、本インタビューを受ける対象者がペップトークの詳細を認知していない可能性が高いと判断し、言葉がけという用語を用いて調査を行った。本インタビューガイドは、対象者が試合前に選手へかけている言葉がけ、その言葉がけがペップトークに当たる言葉がけか、更にそれらの言葉がけの発生要因を探る内容で作成した。インタビュー時間は、平均51分（計153分）であった（表3）。

2-3．分析方法

2-3-1．カテゴリー・サブカテゴリー・概念の生成過程

対象者のペップトークの実態とペップトークの発生要因を明らかにするために、継続的比較法（メリアム、2004）を用いて文書化したデータを分析した。本研究の分析手続きはまず始めに、半構造化インタビューにより得られたデータを意味のあるまとまりごとに選別し、コード化した。第2に、岩﨑（2010）の示したペップトークの定義から、①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）の概念をペップトークのサブカテゴリーに当てはめた（表4.5）。また、①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）の「試合前」の基準は、試合前日から試合が始まる直前までとした。①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）を中心に、個々のコードを継続的に比較し、共通した意味のものをグループ化し、概念とした（表4.5）。更に、概念間の比較検討を行い、カテゴリーの生成をし

ていった（表4.5）。また、その作業を繰り返し行い、概念やカテゴリーを精選していった。これ以上、概念やカテゴリーの分化や統合も行われない理論的飽和状態を迎えた時点で、分析を終了した。

2-3-2. 信頼性と妥当性の検討

信頼性と妥当性の確保のためにメリアム（2004）で示された手続きを用いた。体育科教育学を専門とする大学教員と筆者の2名で、コード化されたデータを用いてカテゴリー作成を行った。80％の一致率に達するまで議論を重ね、80％の一致率を確保することができたため、残りの分析は筆者が1名で行った（Peer examination）。

また、データにおける解釈を対象者に確認をしてもらい、その妥当性の確認を行った（member check）。

2-4. 倫理的配慮

データの収集に際しては、各対象者に目的を説明し、インタビューで意見を伺うこと、インタビュー内容をICレコーダーで録音すること、文書化されたインタビュー内容とその解釈についての確認を依頼すること、インタビュー内容の公開に際しては承諾を得ることを説明し、対象者から音声にて直接同意を得た。

表4. カテゴリーとサブカテゴリー及び概念

カテゴリー	サブカテゴリー	概　念
選手への言葉がけ	ペップトーク	①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）
	肯定的な言葉がけ	②選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前以外）
		③選手に技術的・戦術的なことを伝える言葉がけ
	叱咤	④選手を叱咤する言葉がけ
	コミュニケーション	⑤選手との日常会話・挨拶
言葉がけの発生要因	言葉がけへの工夫	⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための工夫
		⑦選手個々に応じた言葉がけの工夫
		⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫
		⑨選手の考えを引き出すための工夫
	言葉がけへの学び	⑩選手を観察する姿勢
		⑪他者からの学び
		⑫選手への言葉がけについての葛藤
	言葉がけへの指針	⑬選手への言葉がけへの指針
その他	その他	⑭その他

表5. 概念の定義／具体例

概念名	定義/具体例
①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）	・元気にやろう！ ・思い切ってやろう！ ・今まで通りやれば大丈夫 ・安心してプレーしよう ・試合を迎えられることに対しての喜びを選手に話す ・選手同士のコミュニケーションを促す指示
②選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前以外）	・厳しい練習メニューを行う際に、選手を激励する言葉がけ ・練習前に「元気を出していこう！」と選手を激励する言葉がけ ・チーム全体が現段階のレベルを超えるための方向性の提示
③選手に技術的・戦術的なことを伝える言葉がけ	・試合中の戦術に関わる指示 ・練習や試合で注意深く取り組むべき内容の提示
④選手を叱咤する言葉がけ	・危険を回避するための「危ない」等の声がけを怠った際の選手への指導 ・だらけた態度で取り組む選手への「それで良いの？」という言葉がけ ・選手が誤った行動を取った時に「それはだめ」と伝える
⑤選手との日常会話・挨拶	・今日天気良いね、進路はどうするの？といった部活動以外での会話 ・最近足の調子どう？といった部活動に関する会話
⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための工夫	・短い言葉で伝える ・1つ1つ丁寧に伝える ・指導者ではなく、選手と同世代の先輩から伝える
⑦選手個々に応じた言葉がけの工夫	・その選手のレベルに合うアドバイスをする ・試合に慣れていない1年生、緊張している選手への言葉がけの工夫 ・選手それぞれの背景を知った上で言葉がけをする
⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫	・試合期や準備期等の時期の違いからの言葉がけの工夫 ・試合の勝敗によって言葉がけが変わる ・選手全員が集合した場で、練習の目的を伝える
⑨選手の考えを引き出すための工夫	・指導者から選手へ直接聞き出す ・部活動専用のノートを活用する ・発問する形で話しかける
⑩選手を観察する姿勢	・選手の表情から、感情や体調を読み取る ・生徒の行動から成長過程を読み取る（例：最初はメンバー外だった選手が努力を積み重ね，成長していく） ・部活動専用ノートから、選手の現在の心情を読み取り、声がけをする
⑪他者からの学び	・他の指導者の声がけを参考にする
⑫選手への言葉がけについての葛藤	・指導者が行った言葉がけや指示に対して、選手が納得しなかった ・選手間で「あの子だけ褒められている」といった嫉妬感が起こる ・指導者自身が学生時代の指導環境と現代の学生の指導環境とのギャップから生まれる言葉がけの難しさ
⑬選手への言葉がけへの指針	・選手へ絶対に言わない言葉がけや必ず伝える言葉がけを持っている ・指導者が常に持ち続けている言葉がけへの信念、方針
⑭その他	・練習時間について ・選手への事務連絡

3. 結果及び考察

本研究の結果及び考察は、第1に、ペップトークの概念である「①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）」の実態について明らかにすることである。第2に、3名の指導者がペップトークを行うまでの要因を「②選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前以外）」、「⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための工夫」との関連性を明らかにする。「②選手へ激励する、行動指針を明確に

伝える言葉がけ（試合前以外）」は、指導者の試合前の選手への言葉がけを日常的に使っているのか調査するためである。また、岩﨑（2010）のペップトーク成功の条件として挙げている誰にでも理解できるスピーチの工夫をしているかを探るために、「⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための工夫」について調査する必要があるからである。第3に、インタビューの発話率が高かった概念であえる「⑦選手の個々に応じた言葉がけの工夫」、「⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫」、「⑩選手を観察する姿勢」、「⑬選手への言葉がけへの指針」との関連性について考察をしていく。

3-1．3名の指導者の発話率を表6にまとめた。

表6．3名の指導者の発話率

カテゴリー	サブカテゴリー	概　　念	指導者A 発話率（%）	指導者B 発話率（%）	指導者C 発話率（%）
選手への言葉がけ	ペップトーク	①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）	2.5%	3.2%	2.4%
	肯定的な言葉がけ	②選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前以外）	1.3%	3.2%	1.2%
		③選手に技術的・戦術的なことを伝える言葉がけ	1.3%	6.5%	9.8%
	叱咤	④選手を叱咤する言葉がけ	2.5%	3.2%	4.9%
	コミュニケーション	⑤選手との日常会話・挨拶	0%	3.2%	2.4%
言葉がけの発生要因	言葉がけへの工夫	⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための工夫	2.5%	8.1%	7.3%
		⑦選手個々に応じた言葉がけの工夫	11.4%	16.1%	12.2%
		⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫	19.0%	16.1%	6.1%
		⑨選手の考えを引き出すための工夫	7.6%	6.5%	4.9%
	言葉がけへの学び	⑩選手を観察する姿勢	15.2%	4.8%	14.6%
		⑪他者からの学び	8.9%	1.6%	1.2%
		⑫選手への言葉がけについての葛藤	1.3%	6.5%	6.1%
	言葉がけへの指針	⑬選手への言葉がけへの指針	25.3%	17.7%	18.3%
その他	その他	⑭その他	1.3%	3.2%	8.5%

3名の指導者共に、「⑬選手への言葉がけ」への指針についての発話が最も高い割合となった。これは、インタビューの中で、3名の指導者のペップトークに至るまでの要因となる内容が最も多く含まれていると考えられる。また、その他にいずれかの指導者の発話率が10％を越えた概念は、「⑦選手の個々に応じた言葉がけの工夫」、「⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫」、「⑩選手を観察する姿勢」であった。これらの発言も同様、3名の指導者のペップトークに至るまでの要因となる内容が含まれていると考えられる。

上記のことから、3名の指導者の発話率が最も高かった「⑬選手への言葉がけへの指針」についての発話、その他いずれかの指導者の発話率が10％を越えた概念と指導者のペップトークとの関連性を調査することが可能と考えられる。

3-2. 指導者のペップトークの実態

指導者のペップトークの実態について表7にまとめた。

表7. ①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前）インタビュー発話具体例

発話者	発話No.	①選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前） インタビュー発話具体例
指導者A	A-20	唯一、違うことを言わないといけないのが、試合の前日に必ずメンバー発表するっていうのが、一応僕は決めていて、それまではメンバー絶対伏せてるんですけど、ベンチ入りメンバーも含めて。その時は、緊張感を持ってちゃんとチームの代表として出るんだからっていう話はすることはありますけど、それ以外のことについては、基本的にはもう「今までどおりしっかりやっていったら大丈夫や」っていう話をしているのが前日ですかね。
	A-35	「いい顔してやってよ」っていうのと。「会話をしっかりしなさいね」っていうことかな。
指導者B	B-14	ほんとにさっきも言ったように、緊張してる子とかには、今やってるできてることで十分やから、それを思い切ってやりなさいとか、そういうふうな声掛けですかね。緊張してる子が多いですよね。1年生が多いっていうのもあるので。で、自信がないので、言うたら大丈夫やからとか、ほんとに安心させるような言葉掛けが多いですかね。
	B-21	始まる時にはもう、思い切っていけとか、元気出していけとか、声出していけとか、まあ単純に、プレーがああだこうだっていうよりも、言うたら精神的な面で、ぱっとプレーに出せれるように持っていく声掛けをしますね。
指導者C	C-34	試合前にやるのは、やっぱり私たちはここまで来たんだって、この日を迎えれたんだっていう部分の、今日ここを迎えられたことに対して、まずうれしいよねっていうのは、夏の特に大会なんかは。ここまで来たんだからって。あとはやるだけだっていうような。いろんなつらいこともあったって。でも、ここを乗り越えてきたって。そういったところを、もうとにかく自信持ってやれっていうような言葉。もう誰もが分かる、そして、共通の認識、そして、われわれしか知らないものとかっていうのが、一番彼女らにとって理解できるものなのかなって思いますね。
	C-35	相手がすごく格上だった時は、よく使うのが、野球ってアウトを1個ずつ取っていくんですけど、女子野球だったら7イニングで21個アウト。3アウトを7イニング取るんで、21アウトを取ればいいんですよね。なので、アウトを、最後の21を取った時に勝利が決まるのかもしれないんですけど、もうその一個一個の積み重ねやから、やっぱ格上の対戦相手からアウトを1個取るのも多分すごいしんどいんですよね。てなった時に、「アウト1個取った時に優勝したぐらいの気持ちになれ」っていうのは今までよく使ってきましたね。

表7の通り、3名の指導者は、試合前に、岩﨑（2010）の示すペップトークを行っていることが明らかとなった。

表7の発話の「A-20 *今までどおりしっかりやっていったら大丈夫や*」、「B-14 *今やってるできてることで十分やから、それを思い切ってやりなさい*」、「C-35 *アウト1個取った時に優勝したぐらいの気持ちになれ*」の3つの言葉がけは、岩﨑（2010）の示した行動指針の明確化の条件を満たしている。また、「A-35 *いい顔してやってよ、会話をしっかりしなさいね*」、「B-21 *思い切っていけ、元気出していけ、声出していけ*」の言葉がけは、試合前日から試合直前までの違う場面でそれぞれ発言した場合は、ペップトークに該当すると考えられる。

岩﨑（2010）のペップトークの事例で示されていたショートスピーチは、試合を迎えられたことに対する喜び、試合を迎えるまでの苦難さ、試合へ向かうための選手への激励の言葉で構成されている。C-34のインタビュー内容は、岩﨑（2010）のペップトークのショートスピーチの事例の構成に該当していることが示された。

3-3. 指導者のペップトークと選手への言葉がけカテゴリー内の他の概念との関連性

（表8）の通り、3名の指導者は、試合前のペップトークの中で発言している言葉がけと行動指針の伝え方

に関して、試合前以外の場面においても使用していることが明らかとなった。

指導者AのA-59の発話は、試合中に「A-59 *しっかり楽しんでおいで*」と言葉がけをしており、試合前に「A-35 *いい顔してやってよ*（表7)」、試合中に選手を叱咤した際に「A-44 *その顔でやってていいの？楽しいの？*（表9)」と、3つの場面において、試合を楽しみ、それが表情として現れることを求める言葉がけをしている。

指導者BのB-5の発話は、日常の練習開始前に「B-5 *一日元気出してやろう*」という言葉がけをしており、試合開始直前に「B-21 *元気出していけ*（表7)」という言葉がけをしていることから、指導者Bは、試合前と日常の練習開始前に同じ言葉がけを使っている。

指導者CのC-64の発話は、選手達へ向けて行動指針をスピーチ型で示しており、試合前のC-34（表7）の際もスピーチ型で選手へ行動指針を示している。このことから、指導者Cは試合前と試合中に同じスピーチ型で選手へ行動指針を示している。

表8. ②選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前以外）インタビュー発話具体例

発話者	発話No.	②選手へ激励する、行動指針を明確に伝える言葉がけ（試合前以外）インタビュー発話具体例
指導者A	A-59	良かったやつは、試合中にやっぱゲームに集中できてない子に、「しっかり楽しんでおいで」と。やっぱゲームって楽しいもんやから、本来は。だから、勝つとか負けるとか、上手にいくとかいかへんとかってごちゃごちゃ考えたり、あの子が声出さへんとかごちゃごちゃ考えとるよりは、もう楽しんでこいと。て、一言ポンって言った時に、その子が「そうや」っておそらくなってくれて、それも手紙で書いてくれたんですけど、最後に。
指導者B	B-5	一日元気出してやろうとか、こういうこと気をつけてやろうとか。
	B-9	練習中は多分、体力とかを付けないといけない時期とかになってると思うので、頑張らすようなメニューがあれば頑張れ頑張れとか、今ここで踏ん張れとか、そういうこともあるし、ですかね。
指導者C	C-64	良かったことで言えば、うちの選手じゃないけど、日本代表のU18の高校生を見てた時に、優勝しなきゃいけないんですよ。そやのに劣勢で、先制点取られたんかな、台湾に。やばいって、このままじゃやばいってなってた時に、全員集めて、その放送って恐らく世界配信してたんですよ、多分。いっぱいテレビあったから。「あのな」って、「君たちのこのプレーは世界中の人が見てんねん」って。「日本でも君たちの同級生、先生たち、みんなが見てんねん。君たちのその表情で、野球やってててえええと思うか」って。「勝ち負けどうでもええから、みんなに見せてあげられるぐらい、とにかく全力で楽しんでやれ」って。「全力でやったらええねん」って言ったら、いきなり打ちました。謎。

表9. ④選手を叱咤する言葉がけインタビュー発話具体例

発話者	発話No.	④選手を叱咤する言葉がけインタビュー発話具体例
指導者A	A-44	負けてる時は、逆に、だから会話がないので、それを出るように促してあげないといけないというか。「何でこうなってんの」とか、「どこが駄目なの」、「その顔でやってていいの？　楽しいの？」、「あそこで見てる人たちは納得するの？」って、「こういうバレーをしたいから競技やってきたの？」。そういうことは言うかもしれないですね。その状況に応じて。
指導者B	B-37	怒ったからといって関係が悪くなるとか、そんなことは今まであんまりないので。向こうも多分、怒られて当然やと思ってるし。試合っていうよりも、練習の中のほうがありますかね、日頃の練習から、そんなんやからあかんねんとかいうのはよくある。
指導者C	C-57	もう間違いなく、例えばボールって当たったらすごい痛いし、まだうちの現実ではないけど、死亡事故とかやっぱりあったりもするんで、硬式ボールが当たってとかっていう中で。やっぱボール当たったらけがするから、不意に自分が打ったボールが、人がいるところに行ってしまった時とかに危ないっていう声掛けをしなかったとか、聞こえなかったとか、小さかったとかはめっちゃ怒りますね。身の危険が伴うことなんで、声出なかったでは許されないし、そういう競技をやってる責任ってあると思うから、そういう危ないとか、そういう声掛けは、うまい下手関係なく、できないといけないと思うので。あとバット振る時、振ってる人の近く通る時に、「通ります」とか、そういうのは、それで言わへんかったら、「全力でやれ」ってキレてますね。激ギレ。
	C-60	ただ、エラーするのは全然いいんですよ。エラーして、その後の態度がね。自分のことしか考えてないような態度でしたら、もう代えてますね。代える、代える。やんなくていい。反省がないから。

3-4. 指導者のペップトークの実態と選手への言葉がけの【言葉がけの発生要因】カテゴリーの概念との関連性

3-4-1.「⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための指導者の工夫」との関連性

表10の通り、3名の指導者は、岩﨑（2010）の示すペップトークの際に必要な言葉がけの工夫をしていることが明らかとなった。

A-59の発話は、選手への言葉がけの際に「A-59 *一言ポンっと言った時に*」と一言で言葉がけをする発言をしている。また、B-22の発話は「B-22 *割と短い言葉で言いますね*」と発言しており、指導者Aと指導者Bは選手への言葉がけの際に短い言葉を使うことが共通点として挙げられた。このことは、岩﨑（2010）がペップトークの定義としている「短く、分かりやすく、行動指針を明確に伝える」という点に準じている。一方、B-50の発話では、「B-50 *極端に言ってやったほうが、多分わかりやすい*」と「B-50 *ほんとに単純に*」、C-32、39の発話は「C-32 *一個一個丁寧に*」と「C-39 *物事を掘り下げる*」と発言している。これは、岩﨑（2010）がペップトーク成功の条件で挙げている、誰にでも理解できる具体的なスピーチに該当している。また、文化庁（2018）は、分かり合うための言語コミュニケーションの報告書にて、言語コミュニケーションの要素4点挙げているが、内1点は、互いが内容を十分に理解できるように、表現を工夫して伝え合うこと、という分かりやすさを挙げていることから、3名の指導者の行っている言葉がけへの工夫は、選手とへの言葉がけ、コミュニケーションへの必要性を持っていることが示唆できる。

表10. ⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための工夫インタビュー発話具体例

発話者	発話No.	⑥選手が指導者の言葉がけを理解するための工夫インタビュー発話具体例
指導者A	A-59	良かったやつは、試合中にやっぱゲームに集中できてない子に、「しっかり楽しんでおいで」と。やっぱゲームって楽しいもんやから、本来は。だから、勝つとか負けるとか、上手にいくとかいかへんとかってごちゃごちゃ考えたり、あの子が声出さへんとかごちゃごちゃ考えとるよりは、もう楽しんでこいと。て、一言ポンって言った時に、その子が「そうや」っておそらくなってくれて、それも手紙で書いてくれたんですけど、最後に。
指導者B	B-22	試合ってやっぱり最初が大事なんで。特にバスケットなんかはもう、言うたらわってやったもん勝ちっていうのもあるので、それを最初から出せるように。ほんとに試合のアップ見てたら、なんか今日元気ないなとか、覇気がないなとかいう時もあるんで、そうならない、そのまま引きずらないように、やっぱり切り返すように。あまりくどくど言っても仕方がないので、もう、気持ち切り替えていけとかそういう感じ。割と短い言葉で言いますね。
	B-50	試合前なんか特にね。自分自身がプレーヤーやった時も、ですよね。なんかいっぱい言われても頭に残ることが何かっていったら、緊張もしてるし残らないと思うんで、もう、端的に言ってやったほうが、多分分かりやすいし、やりやすいかなっていうのもあるんで。だからもう、ほんとに単純に、行けっていうその時だけ、そのひと言の時もあるし、生徒を信じてるっていうのもあるし。そんな感じですかね。
指導者C	C-32	最近は。一個一個丁寧に。 何も言わなかったですね。もう分かってると思った。でも、やっぱ人数が増えたんで、より慎重に私の考えを言葉にしておいたほうがいいなっていうのは最近思ってます。人数が少なければ少ないほど、言わなくても分かる、数を踏んでるので。でも、人数が多くなればなるほど、やっぱりいろんな選手を使ってきてるから、同じ場面がどんだけあるかっていうのも分からないので、数が少ない、経験値の数が今までより絶対少ないと思うので。ということを考えたら、念には念をで、失敗できない。
	C-39	それも怖いし、そこまでも活気。やから、そういうところの積み重ねちゃうかなって思うんで、そういうことを大会の時だけ言って、できてたけど、今までは。それもやっぱ人数少なかったからちゃうかなってのもあるんで、そういった部分のなぜそれをやるのかっていうのを掘り下げて伝えないといけないんだなって、最近めっちゃ思います。物事を掘り下げる。

3-4-2.「⑦選手の個々に応じた言葉がけの工夫」、「⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫」との関連性

表11、12の回答から、3名の指導者に3点の共通点が見られた。

1点目は、選手の日常の背景などを把握した上で、言葉がけを選んでいるということである。「A-63 *普段から多分コミュニケーションを取っていないと、ここでこれを言ったらこの子にとってすごく効果的やということが分かんないので…普段がバックヤードとしてあるのかなと思います*」、「B-10 *きつく言っても頑張*

れる子もおるし、きつく言ったらめげちゃう子もおるんで…場合と人に応じて変えてる感じですかね」、「C-46 *その人にはそれぞれの背景があるって思ってます。その人が静かなのも、この人がうるさいのも、この人がすごく元気がいっぱいなのも、人に掛ける言葉がきつい人と優しい人とそれぞれに背景あるなと思って*」といった選手1人1人の背景に合う言葉がけの工夫をしていることが発言されている。

2点目は、学年に合わせたコミュニケーションの工夫である。A-71の発話は、各学年の選手とのコミュニケーションを取る際の選手と指導者の距離感について把握している発言である。B-14の発話は、1年生が多いことから試合前に選手が安心するような言葉がけをしている発言である。C-2の発話は、下級生時期には選手の特徴をつかむために日常会話を中心とし、上級生時期には競技に関わる話しを中心にするという人間関係構築へ向けた発言である。このように3名の指導者は学年に合わせたコミュニケーションについての発言が見られた。

表11. ⑦選手個々に応じた言葉がけの工夫インタビュー発話具体例

発話者	発話No.	⑦選手個々に応じた言葉がけの工夫インタビュー発話具体例
指導者A	A-63	効果的かどうかっていうのが、やっぱ自分の中で一番大きいかなと。本人が、だから要は、普段から多分コミュニケーション取ってないと、ここでこれを言ったらこの子にとってすごく効果的やということが分かんないので。だから、普段の声かけとか、その言葉尻とか、いろんな会話をする中で、この子って結構叱ってほしいんやなって思ったりとか、この子って結構やっぱり褒めてもらってせな、乗られへんのやなとか。そういうのを、やっぱりちょっとある程度つかんでおかないと、ベストな一番効果的であろう、時間限られてる中で言う言葉としてはやっぱり出てこないかなと思うので、ケース・バイ・ケースっていうのは、だから、その普段がバックヤードとしてあるのかなと思います。
	A-71	1年生で入ってきた時と2年生で入ってきた時と3年生で入ってきた時っていうのは、やっぱ接し方はちょっとずつ変わってきますよね、どうしても。1年生の時って、見た目がちょっといかついので、最初はやっぱりちょっと距離を取ってくるんですけど、僕、結構距離詰めていくんで、最初から。にこにこしながら冗談しか言わないので、結構パーっと逆に近づいてくるのが1年生の時期で。2年生なったら大体お互いの距離感が分かってきて、ある程度お互い嫌な時期もあったりとか、いい時期もあったりとかっていうのを経て、3年生なったら割とギュッとチーム全体がこっち向いてるというような状態が、今までの感じかな。イメージ的にはそんなイメージです。
指導者B	B-10	状況に応じてですかね。選手にもよるし、なかなかその、全員に対しても言うこともあるし、個人的に言うこともあるし。言うたら、きつく言っても頑張れる子もおるし、きつく言ったらめげちゃう子もおるんで、そこらへんは。反対に、できるから頑張れとかいうふうな声を掛ける時もあるし、それじゃあかんっていう時もあるし、場合と人に応じて変えてる感じですかね。
	B-14	ほんとにさっきも言ったように、緊張してる子とかには、今やってるできてることで十分やから、それを思い切ってやりなさいとか、そういうふうな声掛けですかね。緊張してる子が多いですよね。1年生が多いっていうのもあるので。で、自信がないので、言うたら大丈夫やからとか、ほんとに安心させるような言葉掛けが多いですかね。
指導者C	C-2	野球という競技の中で技術的な会話はもちろんのこと、野球の技術の会話をスムーズにするために、人間関係をやっぱつくるってことはすごく大事なので、上級生になればなるほど、野球の技術が多くなって、下級生になればなるほど、日常会話とか、日常生活とかお互いの趣味というか、どういう感じで生活するのかとか、特徴をつかめるような、こちらのことを知ってもらうということもそうですし、話しやすい環境をつくっていくっていう部分で、1対1の時とかはもう普通に友達のように話し掛けるようにはしてます。
	C-46	最近はやっぱそういう、その人にはそれぞれの背景があるって思ってます。その人が静かなのも、この人がうるさいのも、この人がすごく元気がいっぱいなのも、人に掛ける言葉がきつい人と優しい人とそれぞれに背景あるなと思って。

3点目は、表12の発話から、「⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫」について3名の指導者共に、チームが試合前という状況であれば、試合に関わる技術的・戦術的な内容の言葉がけを中心とすることが示唆された。その中でも、指導者Aは、選手同士の会話が活発に行われている時は、指導者の言葉がけは控えるよう工夫している。指導者Cは、試合に近づくほど、選手が自信を持てるような焦点の当て方を重視している。

佐藤（1995）は、学校教育において、1人1人の個性的な探求活動は奨励され、それらの差異を共有し交歓し合う関係が同時に準備されなくてはいけないことを指摘している。また、上村ら（2017）は、学校現場では、生徒の運動能力、言語的な理解度の個人差が大きいため、その差異に十分な配慮や指示を適切に行うことの重要性を示唆している。このことから、3名の指導者が行う「⑦選手個々に応じた言葉がけの工夫」は、運動部活動でも必須ということが考えられるだろう。更に、岩﨑（2010）は、選手が前向きになっていくためには現状の容認が必要であり、選手の負の感情（ネガティブ感情、不安等）が起きても現在の状態を受け入れた上で、次の行動を考えていくことの必要性を示唆していることから、個々の状態、チーム状態から行動指針を示していくことは必要であると言える。

表12. ⑧チーム全体の状況に応じた選手言葉がけの工夫インタビュー発話具体例

発話者	発話No.	⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫インタビュー発話具体例
指導者A	A-33	試合前っていうことでいえば、常に言うのは今言った2つと、バレーボールの特性上、やっぱ最初の5点で流れが大きく変わるので、「最初の5点、絶対取り切れよ」っていうようなこととか、そんなことは言ってた時もありますかね。最近はちょっと最初の5点も、もう基本的にはキャプテンが言うようになっちゃったんで、もう僕の言うことがどんどん減っていくというか。
	A-42	正直、押せ押せの時っていうのは、こちらが声かけしなくても自分たちでどんどん発言が出てきてる状態なので、タイムアウト中も。正直ほとんどしゃべらないです。もうほとんど選手の会話の時間になってます。相手が例えばタイムアウトを取ってますと、30秒間ありますと、みんなが喜びながら帰ってきて、「あそこもうちょっとこうしような」っていうのをバーって言ってる時間なので、もう極力邪魔しないように。
指導者B	B-12	前日は、チームで多分、やろうとしてる課題があると思うんですよね、その試合に向けて。だからそれの確認、それをちゃんとやろうっていうのは全体に対しては言いますね。
指導者C	C-9	もう試合の前の日に技術的なことを言っても悩むだけなので、もう試合の、私たちも今ちょうど1カ月前なんですけど、じゃあ、その練習の中でどう充実させていくかというか、2カ月前ぐらいは課題ぶった切るぐらいな、課題ばっかりもうどんどん、あれもできひん、これもできひんっていう不安な要素をいっぱい与えるんですけど、これからはもうその不安な要素を1つずつ削っていって、自分たちがこれができるっていうフォーカス、自分たちはこれをやってたらいいんだっていうような視点にフォーカスを変えさせて、少しでも自信を持ってプレーできるようにしていきたいなっていうふうに思ってます。
	C-21	試合前日に関しては、こういうふうな野球で行きたいなと思ってるとか、こういうふうなところを意識していこうとかっていうふうなところは言いますね、前日なのか、前々日なのか。意識しようっていう、相手の対策っていうか、技術的なところを話します。

3-4-3.「⑩選手を観察する姿勢」との関連性

表13. ⑩選手を観察する姿勢インタビュー発話具体例

発話者	発話No.	⑩選手を観察する姿勢インタビュー発話具体例
指導者A	A-37	あと、表情もそうですよね。表情も結局は、いろんな選手、わがままな選手もいると思いますけど、自分のことだけ考えて、うまくいかないからすねてるっていうような表情を、例えば出すと、チームにとって当然、発言はしてないけど、オーラを出してるのは一緒だと思うので、そういうことはやっぱ気を付けようねと。そういう意味ですね。
	A-58	文章を書くと表現できる子っていうのが実はいるんだということがすごい分かって。普段すごいコミュニケーション取るの苦手な子で、今大学1年生の子でいるんですけど、その子はもう、先輩後輩なんかもちろんですけど、同級生ともなかなかコミュニケーション取れない子で。もうほんとに失敗しようがうれしかろうが、もうほとんど言葉を発さないみたいな子だったんですけど、文章を書かせると、めちゃくちゃいろいろ考えてバレーしてんねやなっていうのが、もうそれ見ないと多分分かんなかったと思います。こんなにいろんなこと考えてやっとったんやなっていう。
指導者B	B-15	もう、顔見てたらだいたい分かりますし、今日どうや？って聞く時もあるので。そんな時には緊張してますって向こうから言ってくるのもあるし、一応、今どんなふうに思ってるのかっていうのは、聞くことが多いですね。
	B-29	だいたい、そのアップの状況を見てて、例えば気合が入ってないとか、空回りしてる様子があったりとか、何かそういうのが見えたら、それに応じて、こんなんじゃあかんって言ったりとか、今の感じの雰囲気でいけとか、そういうふうなことを言いますね。
指導者C	C-4	やっぱ目線ってすごい大事だと思うので、ちょっと疲れてそうだなとか、寝不足そうだなとか、あとは表情でやる気に満ちあふれてるとか、ちょっともしかしてグラウンド来るのしんどそうなんじゃないかなとかっていうのは読み取れるかなっていうふうに思います。
	C-17	「基本、ノートは自分自身の記録のために書きなさい」って、「私へのメッセージじゃないよ」って、「自分自身の記録のために書け」って言うんだけど、やっぱり記録を書く部分で、ポジティブなのか、ネガティブなのか、内発的動機付け的な部分なのか、外発的なところしか目が行ってない子とか、すごい分かるんですよね。やっぱり内発的に自分からみなぎってくるものがある子のほうが絶対強い。人にやらされてるとか、人に言われてるとか、人にこうやって言われて、こう私、感じたとかっていうのの、一番は素直さなのかな。素直に物事を捉えて解釈できる子はどんどん成長するなっていうのはすごく感じるから。ノートを見てて、数カ月後が見えるみたいな感じはすごくします。それは本人たちにも言うんですけど。

表13から、2点のことが読み取れる。

1点目は、3名の指導者共に、選手の表情、雰囲気をから選手の気持ちを読み取るような発言がされている。A-37の発話は、選手の表情とオーラから選手の気持ちを読み取り、他の選手への影響を懸念した発言である。B-15、29の発話は、試合前の選手の顔とアップ状況から選手の気持ちを読み取り、アドバイスを送る発言である。C-4の発話は、自己の目線を大事にし、選手の表情から、選手の体調等を予測している発言である。

2点目は、指導者Aと指導者Cの発話は、部活動専用ノートを使いながら、選手の気持ちを読み通ろうとしている。A-58の発話は、指導者が、コミュニケーションを取ることが難関な選手がノートに書き出すことでその選手の気持ちの理解に繋がることへの気づきを表した発言である。C-17の発話は、選手の書いたノートから、競技に対してポジティブなのかネガティブなのか、内発的動機付けなのか外発的動機付けなのかを読み取り、数ヶ月後の選手の状態を予測するという発言をしている。

吉崎（1997）の授業についての知識領域では、生徒についての知識領域があり、この知識は発達段階からみた当該学年の生徒の認知的・情意的・技能的特徴、生徒の知的特性、学習タイプ、性格、といった知識

である。授業で生徒を指導していく上で、生徒の背景を知ることが必要なことを示唆している。部活動も同じ学校教育で行われていることから、選手の背景を知った上で指導に当たることで、円滑な指導に繋げることが期待できる。表11で、3名の指導者は「⑦選手個々に応じた言葉がけの工夫」をしていることが明らかとなり、発話の中で選手の背景に合わせた言葉がけについての発言があった。これらの選手の個々に合わせた言葉がけに至るまでに、表13で3名の指導者から発言された、選手の表情、雰囲気、部活動専用ノートから選手の背景を読み取ることで、それらが実際の言葉がけに繋がっている可能性が考えられる。

上記のことから、3名の指導者は言葉がけに至るまでに、選手の表情と雰囲気、部活動専用ノートから選手個々の背景を探るためのツールとしている可能性が考えられる。

3-4-4.「⑬選手への言葉がけへの指針」との関連性

表6の指導者の発話率で最も高い割合は「⑬選手への言葉がけへの指針」となった。

表14は、3名の指導者がより詳しく発話し「⑬選手への言葉がけへの指導指針」についてまとめたものである。

3名の指導者それぞれが発話の中で、2点の内容を挙げている。

1点目は、指導者AのA-69、70の発話の中で、選手のモチベーションを高めるための言葉がけをしていくために選手とコミュニケーションを取り、極力否定をしないこと、選手が自ら考えるような要素を作ることを発言している。指導者Aの発言する極力否定をしないことは、岩﨑（2010）のペップトークをする際の絶対条件である。2点目は、言葉の環境を含む選手の手の及ばない部分の環境を大人が整えることを発言している。指導者BのB-41、48の発話の中で1点目は、選手達が現在取り組んでいることに対して合っているのか間違っているのか何かしらの言葉がけをすることを発言している。2点目は、部活動以外の面においても、選手が社会に出て通用するよう、悪いことに対してはっきりと注意をする発言をしている。指導者CのC-70、C-71の発話の中で1点目は、他の指導者の言葉がけについて参考にすることはあるが、コピーはせず自分の言葉に責任を持つことを発言している。2点目は、選手からレギュラーの人材選択について問われた際に全部回答することを発言している。

上記の3名の指導者の発話から「⑬指導選手への言葉がけへの指針」で共通していることは、選手への言葉がけへ責任感を持っているという点である。

指導者Aは、「A-70 *選手の手の及ばない環境を整えることについては、やっぱり大人がちゃんとやってあげないとあかんのかなと思うので*」と、選手だけで整えることが不可能なことについて大人が整理していく必要性についての現れが見えた。指導者Bは、「B-48 *社会に出てもやっぱりいいこと悪いことって絶対にあるんで、社会に出た時に通用するようにっていうことで*」と、選手の将来へ向けての人格形成について指導指針が見えた。指導者Cは、「C-70 *自分の発言に責任を持ちたいですよね*」、「C-71 *私出れないんですかって聞かれた時には正確にだから答えれる。人として好きだからとかじゃないですよね。何がいいかなっていうのは。あっちは何が良くて、こっち何がどうなのかっていうのは、聞かれたら全部答える*」と、自分の言葉がけに責任を持つ姿勢が見えた。

上記のことから、3名の指導者は、選手の現在及び将来の取り組みに対して責任を持つこと、選手への言葉がけそのものに対して責任を持つことが示された。

表14. ⑬選手への言葉がけへの指針インタビュー発話具体例

発話者	発話No.	⑬選手への言葉がけへの指針インタビュー発話具体例
指導者A	A-69	第一には、やっぱ選手が毎日わくわくしながら、モチベーションをちゃんと高く保てるような声かけっていうのをしたい。それの、それをするための毎日の日々のコミュニケーションをしっかり取れるようにしたいって思ってます。
	A-70	心がけてること。極力否定しないってことですかね。と、選手がやっぱり自分から考えるような要素を作ってやるっていうことですかね。あとは、だから選手の手の及ばない環境を整えることについては、やっぱり大人がちゃんとやってあげないとあかんかなと思うので。体育館の環境やったりとかもそうですし、さっき言った気持ちの環境とか、言葉の環境とかっていうのを整えるのもそうかなと思うし。
指導者B	B-41	選手は多分、今やってることが合ってるのか間違ってるのか、もっとやらなあかんのか、そのレベルが分からないと思うので、言ってやったほうがいいのかなとは思います。何も言わないと、多分進歩がないので。このように頑張れって、もっと頑張れとか程度を言ってやったら、その程度に応じて子どもたちは動くと思うので。だから声を掛ける。怒るのも褒めるのも、何かしらの言ってあげたほうが、子どもたちもどれだけ力を使ったらいいのかっていうのが、具体的に分かってくるのかなっていうのは思いますね。
	B-48	いい悪いははっきりしないといけないので、いわゆるバスケットのことも含めて、それから生活面も含めて、学校生活も含めて、これはやっていい、これはやったらあかんっていうのは、やっぱり示してやらないといけないので、そこははっきりとやってますね。私割と白黒はっきりしてるんで、だからクラスの子も、これをしたら先生に怒られるっていうのは、多分だいぶ分かってきてるので、そこまでは生徒もやらないです。私が怒ると思うことは絶対しないので。だから、社会に出てもやっぱりいいこと悪いことって絶対あるんで、社会に出た時に通用するようにっていうことで、私はほんとにはっきりしてる人間なので。だから、多分そういうふうに言ってやったら生徒も分かるし、あの子たちがやることがはっきりしてくるんかなとも思うし。
指導者C	C-70	本をよく読むほうだと思うんで、そこで、この言葉いいなとか思った時に参考にさせてもらったりすることはあるけど、意外と同業種の人の話とかは面白いなって思うけど、まねしようとはあんまり思わないかも。何のスポーツでも、いいなって思って、同じことをすることはないと思います。まあ、自分に責任があるから。参考にすることはあるけど、全くコピーはないかな。だから、あんまり覚えてないかな。まあ多分、人と比べられるのはそんな好きじゃないし、自分の発言に責任を持ちたいですよね。
	C-71	選手それぞれも、比較とか特性の理解はしっかりするけど、レギュラーが良くて補欠が駄目というような比べ方、野球の技術とか、こういうことはできて、こういうことはできないとかいう比較はするけど、横並びにして別に比べない。本人たちからしたら比べてるっていう感じがあるかもしれへんから、何であの子が出れて、私出れないんですかって聞かれた時には正確にだから答えれる。人として好きだからとかじゃないですよね。何がいいかなっていうのは。あっちは何が良くて、こっち何がどうなのかっていうのは、聞かれたら全部答える。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、現在の高等学校運動部活動の指導者のペップトークの実態とペップトークを使った指導者の言葉がけへの背景を明らかにすることであった。その結果、以下の点が明らかとなった。

1）試合前に、岩﨑（2010）の示すペップトークを行っていること。

2）試合前のペップトークの中で発言している言葉がけと行動指針の伝え方に関して、試合前以外の場面においても発言していること。

3）選手が指導者の言葉がけを理解するために、短い言葉を使う（2名の指導者）、誰にでも理解できるような言葉がけ（2名）をしている。この結果は、岩﨑（2010）のペップトークの定義である「短く、分かりやすく、行動指針を明確に伝える」に該当し、また、岩﨑（2010）がペップトークの成功条件として挙げている「誰にでも理解できる具体的なスピーチ」に該当していることが示された。

4)「⑦選手個々の状況に応じた言葉がけの工夫」、「⑧チーム全体の状況に応じた言葉がけの工夫」として、以下の3点の共通点が見られた

①選手の日常の背景などを把握した上で、言葉がけを選んでいるということ。

②学年に合わせたコミュニケーションの工夫をしていること。

③チーム全体の状況に応じた声がけは、試合に関わる技術的・戦術的な内容の言葉がけを中心に行っているということ。

3名の指導者が行っている個々に応じた言葉がけの工夫は運動部活動でも必須である。

5）選手を観察する姿勢があり、以下の2点が明らかとなった。

①選手の表情、雰囲気から選手の気持ちを読み取る発言が見られたこと。

②対象者2名から、部活動専用ノートを使いながら、選手の気持ちを読み通ろうとしている発言が見られたこと。

上記2点から、全ての指導者は、選手の個々の背景を探るためのツールとしている可能性が示された。

6)「⑬選手への言葉がけへの指導指針」において、以下の3点が明らかとなった。

①3名の指導者の共通点として、選手の現在及び将来的な取り組みと選手への言葉がけそのものについて責任を持っていると考えられること。

②指導者1名は、岩﨑（2010）の岩﨑（2010）のペップトークをする際の絶対条件である極力否定しない心がけを持っていること。

③指導者1名は、選手へ何かしらの言葉がけをする心がけを持っていること。

本研究の課題は、岩﨑（2010）のペップトークが国内で普及していないため、先行研究が非常に乏しい状況であり、事例的に実態を明らかにすることにとどまってしまったことである。しかし、本研究の結果から、指導者全員がペップトークを行っていることが明らかとなった。そのため、今後は量的な調査手法を用いるなどをして調査対象者を増やすことでペップトークの定義やその効果などについて全般かつ普遍的な傾向を検討することが求められるだろう。ペップトークの定義を明確にすることで、国内の運動部活動の指導者がペップトークのような、選手のモチベーションを高めるような声がけが普及していき、国内の運動部活動の指導者と選手の円滑なコミュニケーションの実現が期待できるのではないだろうか。今後の課題としたい。

引用・参考文献

岩﨑由純（2010）「心に響くコミュニケーションペップトーク」（株）中央経済社.

岩永美月・笹塲育子（2019）「試合における実力不発揮状態の改善に及ぼす声がけの影響」京都滋賀体育学研究，第35巻：pp.19-33.

上村尚代・林容市（2017）「指導者の言葉がけがパフォーマンスに及ぼす影響-成績低下が著しい種目を対象に」法政大学スポーツ研究センター紀要：pp.59-68.

佐藤学（1995）「学びへの誘い 第2章学びの対話的実践へ」（財）東京大学出版会：pp.78-79.

渋谷聡（2015）「スポーツ活動での言葉がけにおける競技者と指導者の認知の違いについて-やる気を高める言葉かけを対象として-」星槎大学紀要共生科学研究，No.11：pp.75-87.

スポーツ庁（2013）「運動部活動での指導のガイドライン 4. 運動部活動での指導の充実のために必要と考えられる7つの事　④適切な指導方法、コミュニケーションの充実等により、生徒の意欲や自主的、自発的な活動を促しましょう」p.6. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/06/12/1372445_1.pdf

スポーツ庁（2017）「運動部の現状について 生徒の運動部活動への参加状況」p.2. https://www.mext.go.jp/

sports/b_menu/shingi/013_index/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2017/08/17/1386194_02.pdf
田沼広之・米地徹（2016）「ラグビー選手の心理的競技能力に関する研究-男子選手と女子選手との比較-」運動とスポーツの科学，第22巻第1号：pp.47-52.
名取洋典（2007）「指導者の言葉がけが少年サッカー競技者の「やる気」におよぼす影響」教育心理学研究，2007-55：pp.244-254.
藤田雅文・佐藤安通（2017）「高等学校硬式野球部監督の言葉がけに関する研究-甲子園大会出場チームの監督を対象として-」鳴門教育大学研究紀要，第32巻：pp.506-513.
文化庁（2018）「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）Ⅲ 言語コミュニケーションのための具体方策 1.言語コミュニケーションの4つの要素」pp.16-21.
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/__icsFiles/afieldfile/2018/04/09/a1401904_03.pdf
松田恵示（2017）「「遊び」から考える体育の学習指導」（有）創文企画：pp.166-167.
吉崎静夫（1997）「デザイナーとしての教師 アクターとしての教師」（株）金子書房：pp.42-44.
S･Bメリアム:堀薫夫・久保真人・成島美弥（2004）「質的調査入門 教育における調査法とケース・スタディ」（株）ミネルヴァ書房.